“吉備津の釜”小考

李　仁　燁

目　　次

Ⅰ．序　論
Ⅱ．本　論
　1．秋成の思想と作品
　2．主人公磯良と正太郎
　3．釜祓いと結婚
　4．「吉備津の釜」と源氏物語
Ⅲ．結　論

Ⅰ．序　　論

「雨月物語」の初刊が、安永五年(一七七六)であるから、今年は刊行後二百余年に當たる。この二百年という時日は、德川幕末の百年と、日本近代の百余年が含まれているはなはだ象徵的である。つまり日本の近代小說誕生の過程、リアリズム形成と開花の時代が含まれていたわけである。その時代に『雨月物語』の虛構性が正當に評價されることはむずかしかった。『雨月物語』は想像力の異形を描いた小說として珍重され、それを書いた秋成は詩人の名で呼ばれてきた。「小說としての『雨月物語』を無視させてきたものがリアリズムであったにもかかわらず、リアリズムが經過することによって、はじめてその意味を正當に認めることができるようになったこともまた否めない。

近世、いわゆる江戶時代は、金錢經濟への移行によって人間の意識が此岸化され、リアリズムが一應發生した。秋成の段階で「虛構」が自覺化されたのは、近代に通ずる文人、知識人によって文學言語の虛構性という中國小說の言語的リアリティ等が流行したからである。そして何よりも、幻想空間としての內部の形成が、現實とのあいだに違和を生じ、知識の傳奇性がつくりだす文章空間が、もう一つの現實として、現實以上に重さをもっていた事實を擧げることができる。虛構は幻想として自立するだけでなく、幻想が現實よりも重さをもったとき、はじめて自覺的に主題化されるからである。

そのような例として、ここで「吉備津の釜」について考えてみると、この小說の場合、いわゆる

近代小說の主人公に當たる人物、作者の自意識の分身としての意識を求めることはむずかしい。「吉備津の釜」の主人公磯良はその當時の道德論理を捨てた時は正太郎とはじめて對等のかたちで描かれており、しかも基本的には他者として設定されている。登場人物の正太郎のうえに作者の自意識の投影若き日の面影を見ることができるわけで、登場人物が作者の私性によって、意識者としてのつながりを設定されていたところに、むしろ戲作性をこえた近代性があったことを認める必要がある。この小說においては、正太郎のうえに作中人物としての正太郎の意識と作者自身の意識のふたつが二重化されながら設定されており、それぞれの意識(不安・恐怖)がひとつの恐怖像を焦點として交叉し集約されるかたちになっていたことがわかる。つまり、のらもの正太郎は、小說のなかの他者であったと同時に作者の意識、あるいは願望の代理者として設定されているわけである。

「吉備津の釜」は、浮氣な夫が妻の亡靈にとり殺されて、あとかたもなくなってしまう話である。人間は論理で行動している動物の如くでありながら、實際には大きく感情に支配されているものであった。

「吉備津の釜」の女主人公磯良も、「白峰」における崇德院と同じく、論理と感情の板ばさみになっている。即ち、論理の方から言えば、磯良には當時の女性が當然守らなければならない幾つかのモラルがあった。嫁いだ磯良は「夙に起、おそく臥て、常に舅姑の傍を去ず、夫が性をはかりて、心を盡して仕」えたことや夫の愛の相手である袖にも「私に物をおくりて、信のかぎりをつくしける」ということなどは、當時の道德下におかれた女性としては當然の行動なのであり、個性を持った一人の女性の姿でなく、當時のモラルを守っている女はすべてこういう行動をとるのだという、當時の與えられた制約モラルに忠實な女性というものの一般概念をそこから得ることができるのである。

ここで當時の人間を縛っている幾多のモラルのうちより、嫉婦の問題を取り上げて讀者に示した。女にとっては、その大小にかかわらず嫉妬は固く愼まねばならぬものであると言い、又、男にとっては、嫉妬は決して女に起さしめてはならぬものであると述べたのである。

論理的に言えば、女というものは、嫉妬の情は片鱗すら示してはいけないものである。しかし置かれた狀況が女にとって苛酷なものであって、そうしたモラルが守れそうのない場合はどうなるか。それを描かんとするのがこの小說である。

それでも、女は必死になって、自分を支えている論理を守ろうとするであろう。そして現實には、そうした努力によって自己の感情を押えきった女性は多かったことであろう。しかし、狀況がもっと苛酷で、女の必死の努力にもかかわらず、女の從うべき論理が守れなくなったらどうであろう。女はついに感情に負け、論理を捨てることになろう。そして論理を捨てた女の心の中にはそれまで押えられていた感情が激しい嵐となって荒れ狂うであろう。その感情の嵐を描いたのが、この小說なのである。嫉妬、怨念と言った感情の荒れ狂う女の心を、もし垣間見ることが、出來たとしたら、その凄絶さたるや目を覆うものがあろう。その凄絶さを描いたのが、この「吉備津の釜」なのである。

「吉備津の釜」の後半部において、恐しい鬼が男の上へ襲いかかる。この鬼の、執念深きこと、

残酷なることは、他に類を見ない。 本文中「かの鬼」とよばれているこれは、本妻磯良の靈であり、とりもなおさず、女の感情そのものである。端的に言えば、「吉備津の釜」は、理でもって自己を統御することが出來ず、感情に押し流されて行く人間の姿、女の感情の恐しさを、怪異という形を通して報復を行う人間の別の一面を表現して見せた小説ということになろう。女の悲しさ、恐しさを描き、これが人間だということを讀者に示したかったのである。

さて、私はこの「吉備津の釜」を考えるにあたっては本論において作者の思想と作品、主人公夫婦・釜祓い(という儀式からの神の豫告)と結婚・先行作品とこの作品との關係を考察し、文學研究とは人間研究の一つである以上、この作品を作りだした作家自身の研究にまで觸れ、この作品が作家のいかなる內面的希求から生み出されたものであるか — この作品を通して人間とは何かを考て見ようとするのである。

Ⅱ. 本　　論

1. 秋成の思想と作品

從來、上田秋成は多かれ少なかれ、國學者として位置づけられてきたが、秋成の思想的立場を明らかにするには、まず、彼の思考方法を通して、いかなる特徴があるかを考察し、國學的思想とどのように異なるかを示すことが述べられるであろう。

そもそも國學思想とは德川幕藩体制强化のイデオロギであった。儒學と對抗して自ら体制の指導理論たらんことを主張した。卽ち服從の政治思想と言うべきものであろう。賀茂眞淵や本居宣長の漢意批判が峻烈を極めたのも、儒學が絕對服從の思想をもたず、下からの批判を認めるという點に集中していた。それ故、彼等は儒佛思想が日本の國情に合わぬという。日本固有の思想とは、決して下なる者が上なる者への批判や不服從をしないところに特徴があるからである。このような國學思想とは「近世封建制度にたいする抵抗に發し、抵抗につらぬかれた學問」[1]でなく、新しい倫理を追求する要素をもつ思想でもない。倫理的には現狀のすべての道德をそのまま肯定し、人間にはア・プリオリにそうした倫理感がそなわっているので「こちたく」教え導く必要はない、という立場をとる。そして人間にある慾望や情感を本來的にそなわったものとみとめながらも、その倫理的限度をも人間は自ら知っているという樂觀論なのだ。

こうした國學の立場とは、秋成は本質的にどう異っているか。そして國學思想でないならば、彼はどのような思想的特徴があるのかを次に明らかにしたい。そこでまず、秋成の儒佛批判がどのように論理的構造で成り立っているのか、國學者の批判樣式とどのように違うかを述べよう。

秋成は『雨月物語』の「白峰」においても述べたように儒教の革命が儒教本來精神からはずれたものであると言い、同時に日本國情に適しないと語っていた。秋成によれば、儒教は教道であって、

1) 鵜月洋, 秋成の思想と文學　日本古典鑑賞講座. 第二四卷『秋成』所收二六八頁

政治論を說く儒學など本道を見失った墮落以外の何ものでもなかったのだ。道德の儒こそ本來の儒教である。卽ち『七儒解』[2]の中で孔子の教えに適った儒は道德の儒であると言う。「其の道は、卽ち仁義禮智信也。其の儒は、則ち父子君臣夫婦長幼朋友なり。その事は知り易く且つ行ひ易し。能く之を行へば身修まるべし。家齊ふべし。國治まるべし、天下平かなるべし」(金砂九、原漢文)[3]という『七儒解』の立場を支持している。これは、仁義禮智信という人倫の道がそのまま平天下につがるとする朱子學の立場である。秋成の儒者批判の視點は、學問や詩作に秀れるよりも、倫理的生き方をしているかにかかっている。秋成は徹底的に政治の儒を否定する立場をとるのてある。彼は自分の『安安言』[4]においても堯の舜に讓り、亦禹に讓ると言う卽ち革命思想にもとづいてとられた禪讓論を批判した說に贊意を表している。卽ち、堯が舜に舜が禹に皇帝の位を讓ったという逸話は、それ自體としては「善」である。しかし、その話を根據として天命のないものは王位に適しくないとして、暴力的王位を奪う「簒位」論の理論的支柱となったが故に、こうした禪讓論など百害あって一利なしであろう、という意味である。つまり支配者個人の無慾から出た讓位は肯定されるが、政治論としての禪讓論は否定さるべきである、というのが秋成の見解である。「白峰」における「放伐論」の西行と崇德院の論爭にあるのがそれである。」

次に佛教に對する秋成の批判をまとめてみよう。

秋成は、飛鳥奈良時代から江戶時代に至るまで佛教が盛んであると見ており、その理由として「無邊無量の冥福を生ずと云語に迷はされ」(金砂九)、ただ利己的な福德果報につられてきたにすぎないことをあげる。それ故、こうした教えこそ人の情慾を募らせ、性質を蕩かす妙法に他ならず、であったと寺院建立や佛像造營を手嚴しく批判し、それ故上代佛教の擁護者となった蘇我馬子入鹿父子[5]や聖德太子を[6]攻擊する。あるいは、淨土眞宗に對して、その肉食妻帶を批判し、門徒宗という宗名を手前勝手と言って笑い、一向一揆など[7]烏合の衆の騷動だった、と言う(胆大小心錄)。

秋成はこれらを佛教の本來の道から逸脫したものとして歎いている。

秋成は正しい、あるべき佛教像を設定していた。それは慾望を去るという悟りの世界であり、自力本願の世界でもあった。彼は晩年、南禪寺に[8]二度まで居をかまえ、又南禪寺の末刹となっていた西

2)『七儒解』は宗濂の游俠之儒、文史之儒、智教之儒、章句之儒、事功之儒、道德之儒、曠遠之儒の七通りがある。

3)『金砂九・原漢文』一秋成の著書
文化元年成立、萬葉集全卷にわたる註釋である。

4)『安安言』一秋成の著書。寬政四年宣長の古代皇國絕對化を排し、當時封建庶民の現實を現實として認識すべきだという意見である作家的人間觀察を通じての秋成の古代史觀が窺い得うれる。

5)蘇我馬子入鹿父子一飛鳥時代の大豪族。權力者父子。

6)聖德太子一(574年一622年)用明天皇の皇子、推古天皇の攝政として內政、外交、佛教興隆、文化向上に努力した。

7)一向一揆一(15,16世紀)に一向宗の信徒による反亂

8)南禪寺一京都の名刹

福寺を菩提寺ときめたことからも知られるように、禪宗への好意を示していた。秋成の佛教批判は、このことからも知られるように禪の立場からなされたものであった。秋成には佛教の何にも執着しない出世間主義への批判はみられないし、むしろ、彼はそうした世の中の何にも執着しない出世間性が佛教の基本であるが故に好んでいたものと思われる。

以上上田秋成の儒佛批判なるものを検討してきたが、それぞれ朱子學や禪の立場に立ってなされた批判であることが知られよう。従って、國學者の立場に立ってなされた批判とは本質的に異っているのである。秋成はまた、朱子學と禪とを等質なものとみなして、これらがともに出世間的禁慾主義の上に形成された倫理として支持しているのである。

また、秋成の國家觀を見るに、秋成は德川幕藩体制を讃美し、その天照大御神による朝廷の權威化を「ゐ中人のふところおやじの說」(胆大小心錄)[9]とやっつけ、又愛國的な神國思想は「よその國では承知すまいだろう」と言っている。これは、秋成には、宣長のように政治的意圖をもって德川幕府の不變性と權威性とを語る必要がなかったからであろう。秋成の德川幕府支持は、もっと單純であった。卽ち個人生活の安定となる「費え」としてにくみ、爲政者の責任と强調する。世が安定してこそ個人の平安が得られるが故に德川幕府の統一平定を讃えた。

宣長[10]の下なる者にとっての政治とは、上なる者のおもむけのままに從うことのみであって、政治のいかなる批判をも、中國の思考方式である下のものが政治批判が出來るということを漢意として退けるに對し、秋成は支配者もやはり、人間として見ており、自由に批判することである。『胆大小心錄』における武士や奉行[11]や大名への批判や皮肉や惡口は國學者のようなしえぬところである。秋成のかかる觀方は町人的、庶民的と言えよう。遠慮會釋なく、武士を戲畫化し、笑い物にしようとはするが、しかし德川幕藩体制に觸れる根本的批判にはつながらない、むしろさける方であった。西鶴以來の庶民性である。だが秋成はそうした庶民的素質をもちながらも、少しく異った要素がみられる。それは、庶民に愛情を示し、接近したとしても、彼の態度が常に高踏的であったことだ。秋成は、儒者にしろ、繪師にしろ、書家にしろ、茶人や歌人にしろ、國學者にしろ、名聲を氣にかけ、金もうけ主義に陷り、奢った生活をするような生き方を嚴しく糾彈する。當時の三井、白木屋、鴻池、小橋屋、辰巳屋といった大商人が、家柄を誇ることを嘲笑し、そういった大商人よりも、まじめで働き者の町人や、實直で金のあまりない小商人への好意を示す。だが、秋成のこのような愛情は、傍觀者の立場にいて成り立つもので、およそ庶民への共感とは異質のものであった。その證據に、女郎、たいこ持ち、舟頭といった社會の底邊の人々や、本當に貧困のどん底におちた人々に極めて冷酷な批判をする。彼等が昔と比べて贅澤になったの、ずるくなったの、とけなすのである。秋成は當時の知識階級とはうまが合わず、そこから避けるように庶民へと接近しいる。秋成の生活はこの世との葛藤であったが、その葛藤からの逃避は、ついに庶民の中からものがれ、より出家

9)『胆大小心錄』一秋成の隨筆で、本居宣長に對して皮肉、罵倒したのがある。

10)宣長一本居宣長という人で、國學者である。秋成と國學の論爭もあった。

11)奉行一武家時代の職名。(主君の命令で物事を行うこと。また、その人。)

に近い狀態へと移る。彼にとっては社會と個人とは連帶關係にありえず、世はあくまで個人に對立するのであった。そこで、せめて彼は個人の生活の平安が得られるように、世の平安を望むのである。秋成の言う個人生活の平安とは、利己的な生活の繁榮とか、共同体社會存續と繁榮とかを意味するのではなく、人格としての個人が自らの人生を追求しうるための平安である。卽ち、秋成は人生を個人の眞理追求の場と見て、この世がそのためにせめて平安であることを望むのである。このような体制擁護論であるので、國學者のそれとは体質的に異っており、個人主義的な出世間主義から出ていることが知られよう。

かくのごとく、秋成の社會に對する認識は、傍觀者的なそれと言い、平和を好む姿勢といい、佛教的色彩の濃いものであると言うことができよう。

本居宣長が、政治上の混亂なども含めたすべてのわざわいの根源を禍津日神[12] の力によるとし、混亂收拾され、安定の方向にむかう力を直昆神[13]による、とする。秋成はこのような非合理的な歷史の解釋に反對し、政治の混亂は「大方治柄を秉違はせたまふ」ところに原因があるとする。政治の混亂や繁榮は爲政者の人格によると秋成は考えている。とくに政爭の原因には、爲政者の人格的欠陷が必ずあると强調している。

例を上げれば、中古以降の歷史的狀況についても、秋成はその政治的混亂が爲政者の治め方に大いに關係ありとする。武家が擡頭したのは鳥羽上皇が暴君だったからであり、保元の亂は崇德院の慾心から始まり、平家の衰退は淸盛の人格的欠陷からであり、源氏が滅んだのは北條政子[14] の婬亂な性格にあり、北條氏が滅んだのは北條高時という大馬鹿者のせいだ、と秋成は言う。このように、爲政者の人格がそのまま政治に反映するという史觀は朱子學のそれにほかならない。

宣長の言う神道では、天照大御神は皇祖神として祭るという面と、八百萬神を祭り災いを避け幸いを祈る面との二つがある。前者は秋成の言う「宗祀」と同じ意味をもつが、後者は秋成の斷固拒否するものだ。彼は無理に利己的福利の追求を、あらゆる場合に拒否するのである。そしてただ「宗祀」という普遍的な價値をもつ面をのみみとめようという、合理主義的な神道觀なのだ。

かくのごとく秋成の思想は、國學の非合理的思想とは異った合理主義のもとに形成されており、禪讓論批判も國學からの影響と見るよりも、すでに日本朱子學者[15] の間にみられた政治性への批判からきたものと見られよう。このように彼の史觀が明らかに、君子の人格性を中心にして考えられたものであるが故に、朱子學のそれであるということができる。秋成が德川体制二百年を戰亂のない太平の世と讃えたが 秋成時代の明和期は田沼意次[16] 全盛時代で あったから、商業の發達と同時に農村における經濟的病弊がますます深刻化しつつある狀況を呈していた。封建制は八代狀軍吉宗による享保

12) 禍津日神—人間に不幸災難をまねく神樣。

13) 直昆神—人に幸福をあたえる神。

14) 北條政子—源賴朝の婦人

15) 日本朱子學—朱熹が太成した儒學の一派。宇宙に理と氣の二元があると說き、人の本性は善であるが氣質の淸濁によつて賢愚の別があるとし、事物の理をきわめて知能を啓發し德性を完成することを唱えた。日本でも、江戶時代、藤原惺窩林羅山などが唱えて當時代の指導精神となつた。

16) 田沼意次—德川幕府の財政方面の中心人物でわいろなど取つて惡政を施した。

の改革斷行にもかかわらず、崩壞の一途をたどり、武士道德の下落、世相風俗の華美、一般的道德輕視といった傾向が强まっていた。吉宗によって强調された質實剛健なる武士道精神も、彼の死と共に忘れられ、田沼意次の商業資本と結びついた政策は、その先驅的意圖にもかかわらず、保守的立場からの多くの非難や中傷の故に、かえってこの時代を陰濕なものとし、傳統的な生活倫理の稀薄化をもたらした。

このような時代に對する秋成の反應は、彼の作品(貧福論)[17]で示したように、德川の世を戰亂のない、太平の世として讃美し、家康の金尊重、儉約、質素といった政策を支持していた。

秋成は德川封建体制を古典的な形態において是認し、理想化していることを示しているように、こうした古典的な彼の立場は人間理解の中にも見出される。彼の志向する人間像は、新しい生き方を追求するそれではなく、古典的なそれであった。「菊花の約」[18]の丈部左門にしろ、赤穴宗右衛門にしろ、極めて古典的な信義を重んずる士であった。同樣に「淺茅が宿」の宮木も古典的封建的な貞女であった。このように社會のあり方にしろ、人間理解にしろ、極めて古典的なものを理想とした秋成であったから、當世風のものに對しては、おのずと批判的にならざるを得ない。「菊花の約」において敵役として登場した赤穴円治は、己れの利を追い求め、士としての義を忘れるという點において、當世風な人間であったのだ。秋成は、『癖癖談』[19]や『胆大小心錄』において、あるときは儒者の道德的退廢を歎き、あるときは流行にのみ左右され眞實を求めようとしない世人の心を歎く。秋成は名利を求める人を好まない。たが德川三百年の太平は、かかる徒が輩出するという弊をもたらした。

秋成が『吉備津の釜』においての封建的古典的倫理とは、親や兄に教養を盡し、家業に勵むことであり、質朴な生活をし、安易に都風の文藝などをひけらかしたりしない男であり、同時に女の色香などにまどまわされるような浮氣心をもたぬ男を理想としたのである。こうした人間であってこそ、自分の命を捨てても他への義理を盡すことができるようになるからである。このような人間とはまさに封建的家族制度を支える存在であり、秋成の志向する道德とは、この封建的なそれであった。

「吉備津の釜」は女の怨みではなく、正太郎の生き方に焦點をおいて解されるべき作品の主題は倫理的なものであり、正太郎がどのように滅んで行ったかを描いているのである。秋成は、家業をかえりみず、父母を尊まず、父母の戒めを守らぬという封建的家の破壞者として描いている。そして「吉備津の釜」において否定されたごとき人間にも、心の持ち方で立ち直れる可能性を示すということで、思想的には封建倫理の再建を示したのである。

彼の生活倫理は、大体に人間としては現實社會に立ちまじわり、生業にいそしみ、身を修め家を立てるべしと云うにある。一がいに儒教的なと評し去らずに、何時の時代でもあやまりのない、常識的だが正しい考えであった。彼の作品に見える倫理も悉くそうだといってよい。登場人物がこれにはずれた時には「吉備津の釜」(雨月物語)の正太郎のごとく、報いをうけるかかる倫理にのっとる心をその「まめ心」から離れたものは、秋成においては「遊び」であった。和歌や物語を作ることは

17)『貧福論』—秋成の『雨月物語』中の短篇
18)『菊花の約』—秋成の『雨月物語』作品中の短篇
19)『癖癖談』—秋成の隨筆

正太郎に對する人格不信であり、彼女の誠實さを踏みにじた正太郎への憤りなのだ。

勿論，經世や人倫の爲ではなくして、古典を讀み研究することも、彼においては「遊び」であった。しばしばそれらをはかない遊びと稱している。要するに秋成においては文學は男子一生の事業ではなかったのである。それらに遊ぶ心は、卽ち「あだ心」である。醫藥を捨てて、閑居の生活に歸す 秋成のその時の現實は、「まめ心」を捨てて、「あだ心」に從う態なのである。これまでの彼の生活信條にそむく行動に出ようとすると、彼は自責を感ぜざるを得ないのである。

秋成は「吉備津の釜」において、家業を重んぜず、父母の戒めを守らない好色漢の浮氣者は、封建的家族制度のはみ出し者であり、他人の誠實さを平氣で踏みにじる人間のカスであると糾彈した。そして、そのよう大罪を犯した男はまさしくその罪の報いを受けるべきであり、そのようにしてどんなにそういう人間が滅んで行くかという人間の生き方を示したのである。

2. 主人公磯良と正太郎

『雨月物語』の第六話である「吉備津の釜」の話は、先妻後妻というより、本妻と妾との間のことで、本妻の生靈が妾を殺し、死靈が夫を殺すのだが、秋成のこの創作は、民俗的事象にかなり作意が加わっていて妾をとり殺す話と、夫を殺す話は、たねとして一續きのものではないようだ。別の話が一つに結合したようなあやうさがあるからだ。『雨月物語』の「吉備津の釜」になると、こなみである磯良は、うわなりである袖をとり殺し、さらに、自分を裏切った夫の正太郎をもとり殺している。秋成は、日本流の妾打ちを描き、さらにそれから一歩進んで夫にまで恨みを向けされる。

> 生きているときにはまさに典型的な貞婦であり、封建婦道の權化ともいうべき模範的女性であった。いいかえれば、人間性とか自我とかいうものを徹底的に完封して、ひたすら忍從と貞淑と自己犧牲のモラルを遵奉して生きていた磯良は、死によって現世のあらゆる抑壓と制約から解放されたとたんに、生來のナイーブな人間性情をとりもどし、本來の純粹なすがたにたちもどったのである。

と鵜月洋氏[20]が述べられたように、「吉備津の釜」は、貞淑な妻である主人公磯良が、夫正太郎の裏切りによって貞節と眞情を踏みにじられたのを怒り、生靈となって夫の浮氣の相手である遊女袖を取り殺し、死後も怨靈となって夫に悽慘な復讐をするという話である。

磯良は何ら欠點のない理想的な嫁として描かれている。それのみか「吉備津の神主香央造酒が女子磯良は、うまれだち秀麗にて、父母にもよく仕へ、かつ歌をよみ、筆に工みなり」という媒酌人の紹介の言葉にもあるように、女性としても最高であったし、妻としても「夫が性をはかりて、心を盡して仕」へるという欠點のない女性として描かれている。さらに、夫の浮氣の相手である袖という女に對しても「私に物をおくりて、信のかぎりをつくす」というのだから、妬婦とは雲泥の差である。そして、袖を京へ送り出してやりたいという正太郎の願いを聞きいれて、磯良は自分の衣服調度を金に換え、さらに實家の母に僞りを言って金をもらい、正太郎に信を盡したのだった。

20) 鵜月洋氏『雨月物月』(角川文庫)二四二頁解說

それ故、彼に裏切られたことを知ったときの磯良のうらみ歎きは、單なる嫉妬とか怨みではない。

それに對して正太郎は、元來好色漢の浮氣者であった。袖と驅落ちーたからと言っても、袖の死後いくばくも經たぬのに、墓參で知り合った女から、彼女の女主人が大變美しいと聞き、「すずろ心」を動かしてしまうような男であった。その上、家業を重んぜず、父母への教養など考えもしない。彼の如き男は封建的家族制度にあっての、はみ出し者であり、完全なアウト・ローである。そして、他人の誠實さを平氣で踏みにじる人間のカスなのだ。秋成はこのような正太郎の罪を糾彈しているのだ。正太郎は袖が病氣になったとき、正太郎はもしや故郷に捨ててきた磯良の靈がのりうったのではないかと惱んだが、もしそのとき自らを反省して歸っていたならば、袖も彼自身も救われたであろう。だが、正太郎は愛の相手である袖の從兄、彦六の「いかでさる事のあらん」という樂觀論を賴りにして、眞劍に反省しなかった。また、陰陽師から危險の迫っていることを告げられた時陰陽師は、普々ならぬ努力によらなければ危險を回避できないと警告し、「此咒を戶毎に貼て神佛を念ずべし」と言ったが神佛を念ずることは、心を清め、自らを反省する事に通ずる行爲であるのに、正太郎は物忌に入りはしたが、夜中ただ恐しさにうち震え、氣絶した狀態になっていた。彼はいかなる危險的狀況におかれたとしても、自らを反省することなどせず、目前の現象に目を奪われ右往左往するだけだ。正太郎はこのように自らの生き方を反省し、立ちかえるべき機會がありながら、それを果しえなかったから、自らの手で墓穴を掘ったようなものだ。秋成は危機に臨んだ正太郎がどのように滅びへと歩んでいったかを描いているのである。正太郎は「おのれをよく修める」こともできず、「禽を制する氣もなく、「雄々しさ」もない。ただ鬼を恐れるのみである。かくてこそ「其身の憂をもとむる」ことになった、と秋成は語っているのである。

作品の本文において、磯良の復讐の恐しさが、非情な殘酷さをもって書かれているが、作者は、磯良の復讐を描くことをねらっているのではない。そうでなくて、正太郎がいかに恐怖におののき、滅びていったかに秋成のねらいはある。讀者は、正太郎を通して、滅びる者の姿を鮮明に見ることができるのである。

このように「吉備津の釜」は磯良の復讐ぶりに焦點をおいて解されるべきではなく、正太郎の生き方に焦點をおいて解されるべきであろう。即ち、正太郎がどのように滅びの道を歩いていったかを、「吉備津の釜」は描いているのである。

『雨月物語』は人間のあり方を追求した文學である。人間のまことを追求したものと言った方がよいかも知れない。彼は浮世草子を書いた時期に、その筆法を西鶴にならいつつ人間を見る目をも學んで來たと言われるが、浮世草子の俳諧的世界ー彼の浮世草子は俳諧的であるーから和歌古典的世界に移ったとき、彼の內部に培われて來た人間觀は彼の最も安心できる形で表現せられ、この雨月物語という傑作を生んだのである。中國の小說の一作一作をその趣向の異なるままに翻案したものが喜ばれ、自分の思想の表現を中心において、そのために先行の作品を利用する態度から、類想類型があちこちにある樣な傾向のものが喜ばれなかったのがその原因であるかも知れないが、何れにせよ「吉備津の釜」は强い一貫した人間性を表現した作品である。

3. 釜祓いと結婚

吉備津の釜祓いとは、吉備津神社の釜祓いの儀式をとり入れたとこからきたものである。そもそも日本人の中には、自分の案ずる人の幸福を神に祈るために吉備津の宮に祈念する人は、さまざまの供物をし、巫子や祝部をあつめて、御湯をお沸し申し、事の善惡の兆を占うのである。巫子が祝詞を誦しおわり、御湯が沸き上る際に善兆には釜の鳴る音が牛が吼えるようであるし、惡兆の際は、釜に少しの音もない。これが吉備津神社の御釜祓いという一種の吉兆の占いである。

さて、「吉備津の釜」という作品において、釜占いはどういう位置を占めているか。婚姻の約束が定まった後、香央家では吉備津神社の釜占によって婚姻の吉兆を占うが凶と出る。このことを怪異小の成立條件に卽して考えるならば、物語りの始まりにおいて神の意志が示されたということは、それは最後にはんらかの形で結末がつけられなければならないことである。その後の事件の展開は、いかに神の意志に逆らう方向に向かおうとも、いずれはその意志の具体的な現われとして結着しなければならない。人間の意志を超えた因果律の支配を基本條件とする怪異小說においては、神の意志は作品の世界を統括する絶對的・必然的なものとしての支配力を持つ。人間がこの運命の必然に逆らうことは、すなわち破滅を意味していた。

「吉備津の釜」において、磯良の悽慘な復讐、正太郎の無殘な最期が神の意志の意志の具体的な現われとして構想されたことは、「御釜の凶祥もはたたがはざりけるぞ、いともたふとかりけるとかたり傳へけり」という結語によって明らかに示されている。釜占の結果は、運命の神的啓示という性格を備えていたのである。吉備津の神話は、「吉備津の釜」の基本的な節の展開を規定し、支配する强力な縱系として、構想の中核をなすものの一つであったと言えるであろう。

神意の傳達者たる神官夫婦が神意を無視し、主人公娘の婚姻を進めたという大罪を、秋成はただ「香央も從來ねがふ因みなれば深く疑はず、妻のことばに從て婚儀とゝのえた」と記し、運命の啓示を豫知し得ない人間の淺はかさを、「まことに女の意ばへなるべし」と慨嘆して見せるのみである。神意より人間界の營爲を優先させる神意冒瀆の罪を犯したことになったが、そのことは、やがて起こるであろう神罰の發現の必然性と、その避け難さを讀者に豫想せしめる復讐鬼と化して夫を虐殺せずにはやまない磯良も、殘酷な報復を受けねばならない正太郎も、いわば神の加護と祝福を受けることなく破滅していかなければならない、罪人の末路の姿を示しているのである。物語の始めに示された神意が當事者の上にどのように具現していくかを見定めようとすることが、讀者の興味の中心を占めていたのであり、それは當然最後に確認されるべきものであったからである。

「吉備津の釜」の主人公正太郎と磯良の婚姻がきわめて便宜的なものであったのは

1。蕩兒正太郎の妻帶による更生を期待して婚姻を急ぐ井澤家の事情と

2。都合よく現われる仲人と

3。娘の緣談を心待ちにしていた香央の妻の積極的な態度

などの事情であった。この婚姻は、當時の家父長社會の規範に則り、ごくあたりまえの組み合わせとして成立している。しかし、この組み合わせには兩家および當事者の關心を呼ばなかった重大

な問題が伏在していた。香央家では、適齢期の娘を抱えて婚姻を急ぐ事情があったために、「農業を厭ふあまりに、酒に亂れ色に酖りて、父が掟を守らない」正太郎の放蕩的性格に對する配慮がなかったこと、井澤家にあっては、磯良の家系の正しさと美貌をもって「吉祥」と判斷し、「よからぬ言を聞ものならば、不慮なる事をや仕出ん」とする磯良の性格を知らなかったことである。この物語の悲劇は、遊蕩的性格でまったく取りえのない正太郎と、家系正しく、容貌・教養・孝心に欠けるところのない、しかし思い詰めると破滅的行爲に走りかねない磯良という、不釣合な夫婦を作り出した兩家の、淺はかで便宜的な婚姻の進め方にあった。その夫婦の破滅へのコースを必然の道節として見詰めているのが、吉備津袖であり、作者であり、讀者であったということになる。

4．「吉備津の釜」と「源氏物語」

「吉備津の釜」の典據とされるものは剪燈新話「牡丹燈記」が全体として關係が多いがその中で磯良像の造型に影響を與えた有力のものとして、勝倉氏[21]は『源氏物語』[22]の六條御息所[23]の人間像をあげている。

「吉備津の釜」における『源氏物語』の影響については、これまでおもに部分的な用語、文章および場面描寫などの面から注目されてきたのであるが、「吉備津の釜」の話の中心をなす生靈・死靈と化した磯良の復讐場面が、「夕顔」「葵」「蓬生」など卷の文章・描寫などを取り入れて構成されており、「夕顔」の卷におけるなにがしの院の場面を想起させる描寫になっていることや、正太郎・磯良・遊女袖の關係が光源氏・六條御息所・夕顔の關係と類似していること・および夫の浮氣に嫉妬して苦惱の果てにもののけに變貌して復讐を果たす磯良の心事行動が、六條御息所のそれを彷彿させる描き方になっていることを考え合せるならば、『源氏物語』の影響は部分的な用語・文章・描寫などの面に止まるものではなく、磯良像の造型・および「吉備津の釜」の全体の構想に深く關わるものであると考えられるのである。

このように生靈・死靈と化して復讐を果たす「もののけ」としての磯良の人間像は、「もののけの人」六條御息所像の影響のもとに造型されたのであり、御息所像から嫉妬・變貌・報復のモチーフを得たことを暗示することによって、「吉備津の釜」が傳統的な「もののけ」思想に繫がる作品として構想されたことを示そうとしたのではないかと推測されるのである。

ここに用いられた語句・文章は、「葵」の卷で夕霧出產をま近にした葵の上が、六條御息所の生靈に取り憑かれて苦しむ場面から取り用いたものであり、後藤丹治氏[24]は『この袖の病態の中に、六條御息所の怨念に惱まされる葵の上の面影が見られないでも無かろう[25]』と述べられておられるが、「吉備津の釜」の場面構成を見ると、急に病氣になって變死する袖は、遊女で正太郎の浮氣の相手として

21）勝倉氏―秋成の研究家
22）『源氏物語』―平安時代の紫式部の長篇物語
23）六條御息所―人物名
24）後藤丹治―秋成の研究家
25）「『雨月物語』に及ぼせる源氏物語の影響」（『國語國文』四の一二，昭和九・一二）

の設定されており、光源氏のかりそめの戀の相手である夕顔の變死する場面と類似するが、姙娠中の葵の上がもののけに苦しめられ、產後まもなく急死する場面とは直接の繁がりを見出せないこと、また、「吉備津の釜」の、遊女で愛人の袖ー鬼化ー變化ー窮鬼ー捨てた磯良への思いと繫がる構成が「夕顔」の卷の、身分素姓不明の愛人夕顔ーもののけー變死ー生靈ー御息所への思いという構成と似通っていること、および、妻の磯良が愛人袖に嫉妬して生靈となってこれを取り殺すという構成が、高貴な愛人御息所が素姓の知れない愛人夕顔を取り殺すという構成と類似しているのに對し、車爭いの怨恨から愛人が正妻を取り殺すという「葵」の卷の構成は、嫉妬・怨恨を持つ者と報復を受けるものとの立場が前者と逆になっていることなどを考え合わせると、この場面が「葵」の卷の用語・文章を取り用いているにしても、磯良の生靈事件は、「夕顔」の卷のなにがしの院における夕顔怪死事件から構想を得たと考えるのが正しいと思われる。

また、夕顔怪死事件については、『源氏物語』研究者の間で、御息所の生靈によるとする說と、なにがしの院に住み着いていた妖怪の仕業とする說とが對立し、いずれとも決着していないようであるが、「吉備津の釜」では袖の悶死に遭遇した正太郎が「窮鬼といふものにや、故鄕に捨し人のもしやと獨むね苦し」と、磯良の眞心を踏みにじったために磯良が窮鬼に化して報復したのかもしれないと煩悶するさまが描かれているから、秋成は、夕顔怪死事件を御息所の生靈の仕業によるものと理解して、「吉備津の釜」の構想を得るとともに、讀者に、『源氏物語』をそのように讀んで「吉備津の釜」の構想と對比することを要求していると考えられる。

つぎに、磯良の生靈によって愛人袖を取り殺された正太郎が、每夕の墓參の途次・新墓に詣でる女の言葉に心引かれ、荒野の一軒屋に美しい未亡人を訪ねて怨靈と化した磯良と對面する場面、および物忌みに籠った正太郎が磯良の怨靈に取り殺される場面も、「夕顔」の卷の文章や描寫を多く取り入れて、なにがしの院の怪奇な情景を連想させるように描かれているこの場面で、荒野の一軒屋に住むという美しい未亡人へのある「ゆかしさ」に心引かれて、磯良のもとに引き寄せられていく正太郎の心情が、夕顔との俗世間を離れた戀に陶醉しようとしてなにがしの院に行き、もののけに籠われる光源氏の心情、と通ずるところがあることも注意する必要がある。

このように「吉備津の釜」における『源氏物語』の影響は、部分的な用語。文章。描寫などの面に止まるものではなく、磯良像の造型や一篇の構想に深い關わりを持っていることが推測される。後藤氏ははやく荒野の三昧堂の場面と「夕顔」の卷との類似性に注目され、「この背景と怨靈との配合は、廢院に宿泊して物の怪の出現にあふ夕顔の構想を偲ばせないであらうか。」といい、秋成が「夕顔」の卷から磯良の復讐場面の構想を得たことを說いておられる。また、氏は「正太郎は光の君であり、磯良は六條御息所であり、袖は葵の上もしくは夕顔上であったとも云へる。」と述べて、「吉備津の釜」の人物構成も「夕顔」の構成に沿うものであることを說かれている。

その後、「吉備津の釜」の構想と『源氏物語』との關連性について特別な關心が持たれることはなく、最近の中對博保[26]氏の說にも

26) 中村博保ー秋成の研家

磯良が袖をとり殺した窮鬼から、夫を食殺す悪鬼に變ってゆく過程には、この『源氏』の「もののけ」を、はっきりとは姿を見せず、なかば不可知化して描いてゆく描法にも、『源氏物語」からの影響があったと考えていいだろう。[27]

とあり、後藤氏の説を受け繼ぎながらも、『源氏物語』の影響を、磯良がもののけに變貌して復讐する場面の構想に限って見ようとする立場が取られているように思われる。

また、高田衛氏[28]は

「破屋」ではかなく死ぬ袖には、「夕顔」の女イメージが重ねられていて、『吉備津の釜』の磯良の怨靈に、秋成が、中世的近世的な嫉妬の執念の姿をとらず、王朝的な「もののけ」のイメージに託そうとしたことは、ほぼ肯定していいであろう。つまり、袖をとり殺したのは磯良の「窮鬼」(生靈)であり、のち、薄暗い林中の一軒屋で出逢った磯良は、「鬼」(死靈)であったのである。林中の草の家を、侍女にともなわれて、正太郎が　訪ねるくだりは文章も「源氏物語」の「夕顔」「蓬生」の文章が、部分に採られ、ちりばめられていて、凄壯な氣分を作る効果となっている。[29]

と述べて、中村氏と同様、磯良がもののけに變貌するという構想を「夕顔」の卷から得たものであると見るとともに、『源氏物語』の文章を取り用いることによって、「凄壯な氣分を作る効果」を生み出していることを説いておられる。[30]

つぎに、磯良像は六條御息所像からなにを得ることによって造型され、六條御息所像と磯良像との間にいかなる共通性や類似性があるかを調べてみる必要がある。

六條御息所は、六條の邊に住む、源氏より年上の、深く物を思い詰める性格の、高貴な女あるじとしてて物語に登場する。この御息所像は、吉備の鴨別の後裔として、家系の正しい吉備津の神主の娘で、「うまれだち秀麗にて、父母にもよく仕へ、かつ歌をよみ、筆に工み」な磯良磯良像と似通うものがある。また、御息所の性格として、深く物を思い詰めることや、人一倍强い嫉妬心や自尊心が强調されるに對し、磯良の性格も、「よからぬ言を聞ものならば、不慮なる事をや仕出ん」という母親の心配や、夫の浮氣を知ると、「磯良これを怨みて」「ひたすらにうらみ嘆きて」死の床に臥してしまう姿から、深く思い詰める性格の持主として設定されていることが共通している。

夫婦の受情關係について見ると、御息所と源氏との間が、御息所の源氏への愛の强まり、積極的になっていくのと反比例して、源氏の心は彼女の豊かな教養と高貴な人柄にひかれはするものの、愛人としての御息所をもてあまし、夕顔との負擔のない戀に心ひかれていくのであるが、正太郎と磯良の結婚生活も、磯良の「夙に起、おそく臥て、常に舅姑の傍を去ず、夫が性をはかりて、心を盡して仕へる」貞淑さに、はじめは「其志に愛でむつまじくかたらって」いたが正太郎がやがて遊女袖と

27）『雨月物語評釋』(日本古典評釋注叢書) 四五五頁

28）高田衛氏一秋成の研究家

29）『上田秋成研究序説』二五六頁

30）謠曲一夕顔には「夕顔の上は物の氣に取られ空しくなり給ひて候。これと申す御息所の御心中恐ろしき御方なれば，御息所の仕業と申し候」とある。秋成が謠曲をよく讀んでいたこと考えると、夕顔怪死事件も謠曲「夕顔」を媒介にして理解したのかも知れない。

妾宅を構えて家に歸らないなるのであり、最初から不調和で、正面からぶつかりあえない愛情模稱を描いている點で共通するものがある。

もののけに變貌していく心理過程を見ても、源氏の動きにふりまわされ、常に恐れと不安に責まれながら、かといって自分を開放することも出來ず、煩悶して思い詰め、ついにもののけに變貌していく御息所の心理の動きと、結婚生活への期待を胸に正太郎の許に嫁した磯良が、眞心を込めた貞淑さのためにかえって夫に裏切られ、深く傷ついていく心理過程との間にも、深く關わりあうものがあるように思われる。柴式部が、御息所という人物ともののけという素材を結びつけるためにはらった周到な心理的計算と配慮を、秋成は、磯良をもののけに變貌するしかない心理狀態へと追い詰めていく「吉備津の釜」の構成に巧みに取り入れていると言える。

また、御息所は、もののけに變貌することによってはじめて源氏と對等の位置に立つのであり、源氏の愛を確認したい、獨占したいという、一人の女のなまなましい息づかいがはっきりと表われてくるのである。磯良が、もののけに變貌することによって、自己を押し殺しつづけてきた封建婦道の呪縛から解き放され、はじめて自我を主張し、夫と對等の位置に立つという構想が、御息所の場合と類似していることがわかる。

六條御息所像と磯良像との間た、以上のような共通性や類似性が認められることは、秋成が磯良の人間像を形成するにあたって、つぎのように、多くのものを御息所像から得たことを示すものと思われる。

女が、その眞心を夫の浮氣心によって傷つけられるとき、愛執は恨みの一念と化し、想像絶する報復の意志となって夫に迫るというのは、物語・說話に多く見られる女の生の哀れな姿である。「吉備津の釜」が、磯良の生を律するものとして、封建社會の婦道の掟と「おのがままの奸たる性」の 持主正太郎と「よからぬ言を聞ものならば、不慮なる事をや仕出ん」とする內攻的な性格の持主磯良との、宿命的な確執に外ならない。悟らずして確執と破滅を呼び起こしていく女の性の哀れで是非ない姿を、秋成は「もののけの人」六條御息所に見出し、磯良像に重ねたのである。

Ⅲ. 結　　論

「吉備津の釜」の主人公正太郎は家の豊かなのにまかせて、家業である農業を厭い、「酒に亂れ色に耽りて、父が掟を守らぬ」放蕩息子であった。息子の身の上を案じて兩親は、よき嫁を娶らせようとして、世話する人もあり、吉備津神社の神主香央造酒の女磯良との緣組みをすすめた。結納も繫ったある日、香央造酒が娘め結婚について、釜祓の儀式で卜すると、凶と出た。しかし香央の妻は娘の緣談を喜ぶあまり、その占いの結果を無視して婚儀を整えた。こうして正太郎と結婚した磯良は、「夙に起、おそく臥て、常に舅姑の傍を去ず、夫が性をはかりて心を盡して仕へければ」、しばらくの間、円滿な家庭生活を維持することができた。ところが、正太郎は間もなく、袖という遊女となじみになり、彼女を身請けするようになった。磯良はなんとかして正太郎を自分の方へひき戻そうと一生懸命にな

るが、彼は彼女の忠告なぞ馬耳東風と聞き流し、ひと月も妾宅へ行ったきりになってしまう。たまりかねた父親が正太郎をとらえ奥の座敷に閉じこめる。磯良はこの時とばかり正太郎に盡し、袖のためにも經濟的援助をするなど、誠心誠意の働きをした。たが、正太郎は磯良をだまし、袖を京へ送ってやる旅費だと言って、磯良に金を工面させる。磯良は自分の嫁入り道具を賣り、實家の母に僞りを言って送金させ、正太郎のた金を用意したのだった。ところが、正太郎はそれを持って袖と二人で驅落ちしてしまった。これだけ盡した磯良であったから、正太郎の不誠實を知るに至って、愕然としてしまう。そして「今はひたすらにうらみ歎きて、遂に重き病に臥」してしまった。

ことここに至って、磯良は女のモラルを守り切れなくなる。激しい感情の嵐に磯良は襲われるのであり、磯良は、女の生き方を規定している論理を捨て、感情によって導かれる方面に進み始める。即ち復讐である。

一方、袖と二人で逃げだした正太郎は、袖の從兄である彦六のもとに身をよせたのがきっかけで、その隣りの一部屋を借り、袖と一緒に新生活を始めた。ところが間もなく、袖は正体不明の病いとなり、物の怪に憑かれたように苦しみだした。そうこうしているうちに七日間ほど苦しんだ袖が死んでしまう。正太郎は泣き悲しみ、袖の墓に毎夕詣でる姿を見て興味ひかれた正太郎は、女に誰の墓かと尋ねる。女は、わたしの女主人の殿方のだと言い、わが女君はさる高貴な方の奥方だったが、大變な美人であるために、上司にねたまれた殿は所領をとりあげられ、遂に病死された、と話す。正太郎はただ女君が美人だと聞いて心を動かし、若い女のあとについて女君の見舞いに行く。ところがその荒れ家で待っていたのは、正太郎の本妻磯良の死靈であった。はじめて愛の相手である袖の從兄彦六と二人で陰陽師の所へ行ってみる。そこで正太郎の身に危[illegible]迫っていることが告げられた(四十二日間)

ここにおいて、モラルを守り通した磯良とモラルを踏みにじった正太郎とがはっきり分かたれることになる。磯良はこの嘆きから重き病に臥すことになり、やがて死ぬが、一方、正太郎はこの磯良から、執拗にして殘酷なる復讐を受けることになる。正太郎の受ける復讐は、きわめて強大な力によって着着と進められて行くのであり、それはどのような手段を講じても逃れようのない嚴しいものであった。結局、これらは一磯良の復讐であることには違いないが一モラルを踏みにじった正太郎に對する誅罰なのである。

正太郎の妻として生きていたときの磯良は、優しい模範的な女性として點の非の打ちどころもないのに、それが一たび復讐に轉ずるや、非常な冷たさをもって機械のように正確に正太郎の上へ襲いかかるのである。磯良の復讐はまず、夫を奪った袖という女の命を奪うことからはじまる。この場合、磯良は自分の正体を正太郎達に明かしていないのであって、袖は「何となく惱み出て、鬼化のやうに狂はしげ」になって死んで行く。ここで磯良が、袖に對して、恨み言のひとつでも言えば、人間らしさが出て救いともなるのであるが、これではとりつく島もない。さらに磯良は、正太郎の「奸たる性」を利用して謀略的に正太郎を荒野の三昧堂に誘を寄せる。「あるじの女屏風すこし引あけて『めづらしくもあひ見奉るものかな。つらき報ひの程しらせまいらせん』といふに、驚きて見れば、故郷に殘せし磯良の幻なり。顔の色いと青ざめて、たゆき眼すさまじく、我を指たる手の青く

ほそりたる恐しさに、『あなや』と呼んでたをれ死す」ーここでもまた磯良は、全く正太郎を寄せつけない非情さを示している。着着と進められて行く復讐の手順のひとつとして、自分の正体を正太郎の前に示すだけで、正太郎は、相手の慈悲を乞うとか悔い改めることによって和解するかというような、自分を救う方法についての手がかりすら與えられていないのである。正太郎は、ただ、復讐の刃が自分の上にじりじりと降りて來るのを無抵抗に待つしか能がない。しかも、ここで氣絶した正太郎が別段命を奪われることもなく、やがて息をふきかえすのも、磯良の同情によるものではない。それどころか、より大きな恐怖を與え、より殘虐な方法をもって殺すために磯良が一時的に正太郎を見逃したに過ぎないのである。正太郎は、陰陽師にすがって何とかこの恐怖から逃れようとするが、陰陽師のほどこした處置は、正太郎の受ける苦痛をいたずらに引き延ばしたに過ぎない結果となってしまった。四十二日の間、磯良の靈は「夜ごとに家をめぐり或は屋の棟に呼びて、いかれる聲夜ましにすざまし」くなっていき、ついに今日で終りという四十二日目に至って、かの鬼（磯良の靈)はまことに狡智なるトリックを使って、正太郎をとり殺してしまう。卽ち、夜が明けたかの如くに見せかけ、ほっとした正太郎が戶をあけるや、かの鬼磯良の死靈は正太郎の上へ襲いかかって、あともかたもなく正太郎の命をうばいとって殺したのである。

このように貞淑な妻である主人公磯良が夫正太郎の裏切りによって貞節と眞情を踏みにじられたのを怒り、生靈となって夫の浮氣の相手である遊女袖を取り殺し、死後も怨靈となって夫に悽慘な復讐をするという話である。

秋成は正太郎が家業を重んぜず、父母への孝養など考えもしない正太郎の如き男は封建的家族制度にあっての、はみ出し者であり、完全なアウト•ローである。そして、他人の誠實さを平氣で踏みにじる人間のカスである正太郎の罪を秋成は糾彈しているのだ。

「吉備津の釜」は浮氣な夫が妻の亡靈にとり殺されて、あともかたもなくなってしまう話である。

國文抄錄

「吉備津의 釜」小考

李 仁 燁

『雨月物語』의 참다운 目的은 人間의 諸相의 描寫인 것이다. 怪異를 보다 더 무섭게 느끼기 위한 描寫나 設定에 있어서는, 秋成는 非常한 努力을 기울이고 있지만 그것은 人間의 어떤 面을 描寫하는데 가장 效果가 있도록 하기 위한 目的에 따른 것이다.

秋成에 있어서는 現實世界가 眞實인 것처럼 怪異의 世界도 또한 眞實인 것이다. 人間을 描寫하는데 있어서 怪異世界의 論理는 단순한 空想적인 妖怪의 世界가 아니라 이 怪異속에서야말로 世界의 眞實한 모습을 볼 수 있다는 것이다.

『雨月物語』를 怪異小說이라 함은 怪異世界를 使用하여 人間의 眞實한 모습을 볼 수 있다는 것이다.

『雨月物語』를 怪異小說이라 함은 怪異世界를 使用하여 人間을 描寫한다는 意味임에는 틀림없다. 하지만 怪異描寫가 優秀하다고 해서, 怪異描寫를 目的으로 쓴 怪異小說이라 함은 잘못된 해석이다. 『雨月物語』에 있어서 超現實의 世界라는 것은 人間世界와 동떨어진 것은 아니다. 人間論理가 —— 倫理도, 愛情도, 其他상황도 —— 그대로 人間世界의 延長인 것이다.

「吉備津の釜」는 日本近世 江戶時代의 怪談小說 『雨月物語』의 第六話 短篇이다.

吉備津の釜라는 것은 一種의 占인데 그 當時에 流行된 一般庶民들의 믿었던 民俗信仰이다.

主人公 正太郎은 富農의 長男으로서 祖上代代의 生業인 農業을 싫어하고, 酒色에 빠져 그날그날을 즐기고 있다. 子息의 將來를 걱정하는 兩親은 좋은 子婦를 선택하여 아들의 마음을 安定시키려고 했다. 한편, 그의 妻 磯良의 친정에서는 婚期에 처한 女息의 婚談을 기뻐한 나머지「吉備津の釜」에 依한 점괘가 凶兆인데도 불구하고 대수롭지 않게여겼으며, 이리하여 두 집은 子女를 結婚시켰다. 封建制度社會의 婦道를 갖춘 아내는 出家後 아침새벽부터 일이나서 밤 늦게 까지 媤夫父母님을 잘 공양하고 男便에게도 재치있고 順從奉仕하여 家庭을 圓滿하게 지켰으나, 放湯한 男便은 婦人의 誠心誠意따위 아랑곳도 없이 얼마안가서 다시 탈선하였다. 本妻 磯良는 男便을 다시 돌이킬려고 努力하고 男便의 請 即, 袖에게 상당한 위자료를 주고 絶緣하겠는 제안을 받아들였다. 그 돈을 마련하기 위하여 自身의 結婚當時의 패물과 친정어머니에게서 거짓말을 꾸며서 얻은 돈으로 위자료를 마련해 주었다.그러나 結局 正太郎는 그것을 基金으로 花柳界女性 袖라는 遊女를 妓籍에서 落籍시켜 새살림을 차렸다.自己의 아내를 속인 男便의 不誠實과 自己 아내에 對한 男便의 人格冒瀆을 磯良는 더 이상 참을 수가 없어서 드디어는 重病으로 일어나지 못하였다. 故鄕에 내 던져진 이러한 本妻 磯良의 저주(生靈)는 生前에는 男便의 사랑의 相對인 袖를 原因不明의 病에 걸리게 했으며 一週日後에는 死亡하게 하였다. 그 後 磯良 自身도 역시 恨歎한 끝에 病死하였으며 그녀의 死靈은 女子를 무턱대고 탐을 내는 好色家인 男便의 性品을 利用하여 巧妙하게 유인하고 四十 二日間이라는 죽음의 危險이 迫頭한다는 것을 陰陽師(巫당)을 通하여 선언했다.

危奇一步直前 함정에 빠진 죽음 앞에서도 무서워만 할줄 알고 自己自身을 反省할 줄 모르고 自制할 줄 모르는 男便의 生命을 若干의 흔적만 남긴 채 빼앗았다. 이것은 누구의 잘못이냐.

正太郎의 妻 磯良는 生前에는 封建制度社會에서 婦德을 갖춘 模範的인 나무랄데 없는 착한 女子일지라도 一旦 억제할 수 없는 復讐心이 생기면 極端의 冷情함과 殘虐性이, 男便을 떠나가게한 戀敵을 죽게하고 음란한 言動을 하는 正太郎의 性品을 利用하여 謀略的으로 正太郎을 荒野의 三昧堂으로 誘引하여 鬼神인 自己의 正體를 잠간 드러내보임으로써 氣絶시키고 正太郎으로 하여금 復讐의 칼날을 피할 수 없게 하였다. 보다 더 무서운 恐怖와 殘虐한 方法으로 復讐殺害하기 위해서 四十 二日間이라는 時間을 磯良는 一時的으로 지체시켰을 뿐이다. 正太郎는 陰陽師에게 매달려서 逃避하려고 하지만 每日밤 집 周圍를 巡回하며 드디어는 오늘로 마지막이라고 하는 四十 二日째에 이르러서 磯良의 怨靈은 狡智한 속임수로 正太郎에게 새벽인양 착각을 일으키게 하고 門을 열자 磯良의 死靈은 正太郎를 덮쳐서 그의 生命을 앗아간 것이다.

이와 같이 貞淑한 妻인 主人公 磯良는 男便 正太郎의 背信에 依해서 貞節과 眞情을 짓밟힌 것을 激憤하여, 生前에는 生靈으로서 男便의 愛人을 殺解하고, 死後에는 怨靈이 되어 男便에게 悽慘한 復讐를 한다는 것이다.

作者는 여기에서 그 當時 人間을 制裁하는 몇개의 道德中에서 女性의 嫉妬問題를 들었다. 女子는 그 大小에 불구하고 嫉妬는 自重하여야 하며 男子는 女子로 하여금 嫉妬心이 생기게 해서는 안된다는 것이다. 이것은 그 當時에는 常識이고 現實的으로 女性들이 억지로 自己의 感情을 抑制해야 했다고 생각할 수 있다. 그러나 狀況이 可酷하고 自身의 感情을 抑制할 수 없게 되면 倫理·論理를 버리고 感情的으로 激化하게 된다.

「吉備津の釜」는 그 좋은 例로서, 무시무시한 本妻의 魂魄이 男便을 넘치고 그 死靈의 執念이 强하고 狡智하고, 殘酷한 것 等等은, 곧 女子의 感情 그것인 것이다.

端的으로 말하면, 「吉備津の釜」는 女子의 感情이 얼머나 무서운가를 怪異라고 하는 作品을 通하여 表現해 본것이다.

아울러 秋成는 正太郎가 生業인 農業을 輕視하였으며, 父母에 對한 孝養등을 念頭에 두지않는 封建的家族制度下의 無法者, 他人의 誠實함을 태연하게 짓밟힌 人間쓰레기의 終末이 어떻게 罪값을 치루고 滅亡해 가는가, 그러한 人間들을 規彈한 것이라 하겠다.